
Love letter

PIRO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love letter

【ZPDF】

Z0809D

【作者名】

PIRO

【あらすじ】

中学生の女の子真希は同級生の坂口くんが最初は苦手だったが、シャーペンを貸したことによって話すようになつた。夏休みのある日真希の日課になつていた天体観測をしようと公園にいくと坂口くんはベンチに座っていて、一緒に星をみるとことになる。坂口くんへの思いを真希は手紙につづる

突然、こんな手紙を書いてごめん。どうしても私の気持ちを伝えたくて。最後まで読んでくれたら嬉しいです。なんて、最後まで読んでつてことなんだけど（笑）

私と坂口くんが会ったのは、入学式の教室で集まつたときだつたよね。私と坂口くんは、座席がとなりだつたんだよ。覚えてるかな？（笑）私は覚えてるよ。だつて、坂口くんつたらすつ「ぐくうるさいイメージで、始めの頃はハッキリ言つて私、苦手なタイプだつて思つてたんだ。怒らないでね（笑）でも、私の気持ちはあの時に変わつたんだろうなつて思う。入学式から一週間たつたあの日、坂口くんは筆箱を忘れて困つてて、それに気付いた私は坂口くんにシャーペンを貸したんだ。明らかに女の子のものつて感じの物だつた。渡してからしまつたつて思つた。でも、坂口くんは嫌がるどころか、ありがとうつて言つてくれたんだ。私、少し意外に感じちやつたよ。だつて、坂口くんつてお礼言いそうにないんだもん（笑）そんな意外なところがいいなつて思つたよ。それから、坂口くんのことを知りたいつて思つたんだ。

それから、少しづつ坂口くんから話しかけてきてくれて嬉しかつた。坂口くんのことを知れたらし、なにより坂口くんつて賑やかなのに、たまにすごく寂しそうな目をするんだよ。わかつてた？？なんで、そんな目をするのか気になつてた。そんな悲しい目をしないで。今まで寂しくなりそうな目だつたのを覚えてるよ。でも、それを知つたのは少し後のことだつた。夏休みのときだよね。

私はいつも口課にしていた夜の星を観るために近くの公園に行つた。そしたら、坂口くんがいたんだ。ベンチに座つてなんだか、途方もなく、悲しそうに下を向いているような気がした。

「坂口くん？」

つて私はわからないように声をかけたけど、本当は坂口くんだけですぐにわかつてたよ。でも、気軽に声をかけたらいけないんじやないかって思ったからわざとわからないふりをしたんだ。

「田中さん？」

坂口くんはいつものような口調と態度で話しかけてくれたけど、なんか、いつもと違つたよね。

「なんで、こんな時間にこんなところにいるの？」

私は不思議に思つて聞いたんだ。だつて、いつもはいないから。なんとなくね……」

「ごめん。きいちゃいけないとだつたかもね。あの時の坂口くんの顔覚えてるよ。

「そつ、もうだ！ 坂口くん、上を見上げてみて！」

私は坂口くんに元気を出してもらいたくて、咄嗟に言つたんだ。坂口くんは訳がわかんないつて顔で私見たのを覚えてる。そうだよねえ。（笑）私だつていきなりそう言われたはあ？ つて思つもん（笑）

でも、坂口くんは、私の言つ通りに上を見上げてくれたんだ。ここ の公園は電灯が少ないし、建物もないから、空を見上げるにはいい場所なんだよ。上を見上げた坂口くんは、しばらくの間黙つていたよね。私は、やっぱり馬鹿らしいと思つたよなつて考えてた。だって、星に興味のある人なんて、いないだろうし。そしたら、坂口くんは、私の思つてたことと違つことを言つてくれたんだ。「うおおー！ すげえ！」

いきなり叫んだからびっくりしたよ（笑）何事かと思つた。（笑）

「こんなに沢山星が見えるんだな！」

つて、私にキラキラした目でこいつから思わず吹き出しちゃった。（笑）

「なんで、笑うんだよ。」「いや、坂口くんって結構こいつのもの楽しむんだなあって思って。」

ホントは元気になつてよかつたつて思つてたんだ。それに喜んでくれてよかつた。

「田中さんだつて星を見にこんなとこひらくなんて思わなかつたよ。」

なんとなく坂口くんは、照れてるみたいにそつ言つたのを覚えてる。

「なんで、こりにいたの？」

坂口くんは、私にそう聞いたよね。

「私は星を観に来るんだよ。」

つて私は言つた。星空を見上げると自分の考へてる不安や悲しみが、ちっぽけで、あの光つて輝いている星はなんだかとても大きく私は見える。

「光つている星は何億光年も先のところで自分自身を燃やして光輝いているんだよ」

私は呟いた。

そうなんだよね。

あの輝いている星は何億光年もかけてこの地球に人に見えるように光っている。

今見えている星はもしかしたらもうその場所はないのかも知れない。坂口くんは笑うかもしれないけど、私はね、あの光輝く星に誇りさえ感じるんだ。まるで、自信を持つて、自分をアピールしていふみたい。でも、決してうるさくない、優しい光で輝いている。そんな星を觀ることで、私は、自分もあの星のようになれると思えるんだよ。「…俺んちわ…。」坂口くんつたりぽつりと話すから最初空耳かと思つたよ。

「俺んち、親の仲が悪くて、毎日喧嘩ばっか…。母ちゃんは泣い

てるし。」坂口くんは、空をみて笑い話でもするような感じで言つてたけど、泣きそうだったのを覚えてる。そんなすりごく泣きたいくらい悲しいのにどうして無理して笑うんだよ。私のほうが悲しくなったよ。

「ねえ、もし、坂口くんさえよければ夏休みのときだけ一緒に星を見ない？」

思わず私はそう言つてた。だつて、なんだかそう言わなきゃいけない気がしたから。

「…そうだな！俺暇だしな。」

坂口くんはぽつりと言つた後にこう私に言つたんだ。

「夏休みの間よろしくな！」

それから、私は夜が待遠しくて待遠しくてたまらなかつた。夜になれば坂口くんに会えるから。

「なあ、星つてさ、どうしてあんな風に光つてるんだろうな。」

坂口くんは夏休みも終りに近いときにそう私に話して來た。

「うーん。理科とかでは、燃えてて太陽みたいに光つてるんだって言つてたよくな…。」私はそうこたえた。「俺は、あの星たちは自分はここにいるよつて言つてるような気がするんだよ。」

坂口くんは空を見上げて優しい顔をして言つてた。

「そつかあ。私はここにいるよつてお互いの位置を教えあつているのかもね。宇宙は星がなかつたら暗くて、わからないから自分自身を光させて相手に教えるのかもね。」

私はそう言ひながら坂口くんのほうを見た。そしたら、坂口くんと目が合つた。なんだか、目が逸らせなかつた。坂口くんに見とれたのかも。だから、坂口くんの脣が近付いて触れてもわからなかつた。でも暖かかつた。その後は私も坂口くんも無言で、星をみた。あの時流れ星が流れたら私は坂口くんと…。夏休みが終わつて学校に行くと坂口くんの姿はどこにもなかつた。休みかなつて思つたら先生が引っ越したつて。どうして？どうして、だまつていなくなつちゃつたの。私、まだ、坂口くんに言つてない！言わなきゃい

けなかつたのに。

大好きだつて。坂口くんが誰よりも好きだつて言いたかつた。あの悲しく夜空を見上げていた坂口くんも。初めて空を見上げてはしゃぎまくつた坂口くんも。大好きだよ。今でも。今、あなたはどこにいるんだろう。星空を見上げているだろうか。

私は今も坂口くんを思いながら見ています。私が星になれたら、あなたを探すのに。

最後になるけど、好きって気持ちを教えてくれてありがとう。人を好きになるのって幸せなことなんだよね。坂口くんが幸せであることを心から願います。

真希

(後書き)

初めて小説を書くところ」としたので暖かくみてほしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0809d/>

Love letter

2010年11月9日14時29分発行